

まずい！

七星リツ

「まずい！」

彼女が叫んだ。

まずかったか。

彼女が突然そんな大声を上げることなんてないから、驚いた。それほどまずかったのか。味見の時には何も感じなかったんだけどなあ……もしかしてこれが女子力というやつか。私にはないやつだ。

「これ、何入れたの？」

「普通のものしか入れてないよ？」

「普通のものだけ入れてたらこんな味しないの。ねえ、何入れたの？」

「何って……普通にゴハンとタマゴとサトウ入れたただけだよ……」

「サトウか……」

「え？ もしかしてサトウ駄目だった？」

「いや、駄目じゃないんだけど、」

チャーハンにサトウは駄目だったか。つきあいはじめて半年で初めての気付きだ。彼女はサトウが嫌い、と。

「これ、本当にサトウ？」

「本当にサトウだよ。だってシオとサトウは間違えないように調味料入れにちゃんと書いてあるじゃん」

「じゃあ、本当にサトウなのね……」

……今度からはソースで作ろうかな。

「なんでもかんでもソースとかミソ付けたらいいってわけじゃないからね。」

彼女には私の考えていることは全てお見通しのようだ。さすがとも言える。

そういえば最近気付いたんだけど彼女は味噌汁を白ミソだけで作ってたんだよね。実家では白ミソと赤ミソを混ぜて作っていたから初めて彼女の味噌汁を食べたときは驚いていたな。そういう違いなんだろう。元々料理が得意なわけではなかったし味覚も彼女のほうが濃い味派だからそりゃあ合わないこともあるし不味いつて思うこともあるよね。

それにしてもおかしいなあ。最近は先生のもとで料理

を教えてもらってるから食べられないほどじゃないと思
うんだけど……。結局、先生にどれだけ教えてもらって
も私のバカ舌は治らないから料理って難しいままなんだ
よね。彼女が料理出来たらよかったんだけどね。彼女は
箱入り娘だから料理できないんだよね。だから私が作る
しかない。仕方のないことだね。

「そういえば、最近変な音が聞こえる気がするんだけど
何か知ってる？」

「知らないよ」

心を読まれたような気がした。気のせいかな。

気のせいではないかもしれない。彼女は先ほどまでと
打って変わって小さな視界で周りを探索するような様子
になっている。普段から私の考えていることを当ててく
るが、それ以上に心の深層を覗かれているような気がす
る。気のせいであってほしい。

「あ、味変する？」

「味変？」

「サトウ以外だったらいいんだよね？」

「いいというか……」

「ミソならあるよ」

「ミソチャーハン?!」

「地元なら何でもミソ合わせてたよ」

「あんたの地元は普通じゃないの……」

「そんなことはないよ」

確かにかなりムラ社会の地域だからこっちに出てきて
から地元とは違うことがたくさんあって驚いたけど、そ
んなに変わってる地域だとは思わないなあ。だって全部
お母さんやお父さんに教えてもらったことだから。

彼女にはいろんなことを教えてもらって違うことにも
何とか慣れていったなあ。エスカレーターは左側に寄る、
外ではお母さんと呼ぶ、集合時間は活動開始時間、カラ
オケはみんなで盛り上がれる曲を歌う、お酒は飲まなき
やノリが悪い人、ハタチまでに処女は卒業する、主張し
すぎない、みんなに合わせる。

本当に彼女には沢山教えてもらった。全部その通りに
した。エスカレーターに乗る時はちゃんと左側に寄る。
外ではまじやなくてお母さんと呼んでる。集合時間
の三十分前には集合場所に着くようにしてる。カラオケ
は今流行りの曲を歌ってる。未成年のうちにお酒も飲ん
だ。十九のときにサークルの先輩で卒業した。意見があ
っても手は挙げない、自分の話は最低限しかしない。で

きるだけ空気に、空気になって、みんなに溶け込めるように、みんなに普通って思ってもらえるように。

それでも普通じゃないって言われる。特に彼女に。今みたいに。

「じゃあ私はどうしたらいいと思う？」

「どうしたらって……味付けの話だよな？」

「そうだよ」

「うーん、難しいなあ。私が料理できるわけじゃないから確実なことは言えないけど……」

「じゃあ言わないでよ」

「……なにその言い方」

「じゃあ言わないでって言ってんの、できないくせに文句だけつけてこないでよ。文句言うなら自分でやったらどう？」

「どうしたらいいか聞かれたからわからないなりに答えようとしたんじゃない。それなのに勝手に怒ってさ、そんなに強く言わなくてもいいじゃん……」

今にも殴り掛かってきそうな勢い、の気がする。殴れないだろうからわからないけど。

「……ごめん」

謝られた意味はよくわからないが、人はこういうときにも謝るといふことだろう。新たな知見だ。

「……ごめん、確かにあんたが言ってることも正しいよ。」

「でも、正しさだけがすべてだと思わないで。」

……言ってる意味がよくわからないけど、たぶん大事なことの気がする。

「最近のあんた、地元から出てきたばかりか、私と会ってすぐくらのところに戻ってるよ」

「そんなはずないよ」

そんなはずない、そんなはずないよ。だって、一生懸命普通になろうとしてるんだから。今になって昔に戻ってるだなんて……そんなはずはないんだよ……

「この箱だってさ、無理やり私を入れてなにがしたいの？」

「だって君のことは守らなきゃって思ってる」

「守るってそういうことじゃないんだよ」

「地元では普通だったから」

「だからあんたの地元は普通じゃないんだって」

「じゃあどうしたら」

「ただそばにいて協力し合えればいいんだよ」

「こんな無理やりな方法じゃなくてさ」

彼女が箱を壊した。箱を壊してしまった。箱を壊されてしまった。彼女が箱から出てきてしまう……

地元では高校卒業後に汚れてしまわないように卒業後二ヶ月は箱に入れられる儀式がある。彼女はそれを経験したことがないっていうから汚れないように箱に入れてあげたのに。なんで出てきちゃうかな。

「ねえ、ちゃんと向き合おう？」

「向き合ってるよ」

「まだ普通に戻れるよ、社会に戻れるよ」

「ここが社会だよ」

「じゃあその社会ってのを私にも見せてよ、隠してないでさ」

「……それは、無理かも」

彼女の目に涙が浮かんでいる。泣いている。悲しいのだろうか。

「なんで、どうして、目を覚ましてよ」

「目は覚めてるよ」

「頭が起きてないよ」

「頭も起きてるよ」

「そう錯覚してるだけ」

「わかった、私があんたのことを起こしてあげたらいいんだね」

「起きてるって」

「目を覚ましてあげるから」

彼女が調理室を開けようとする。

「あ、その部屋は」

まずい

「……なに、これ」

その部屋は

「……なんなの、これ、あんた本当におかしいんじゃないの？」

おかしくない、おかしくないはずだ、だって先生の言いつけを全部守ったんだから

「なんで人の死体がこんなところにあるのよ」

「違う」

「何が違うの？」

「違う」

「何が違うの？ あんたが人を殺したからこんなところに死体が転がってんじゃないの？」

だってこれが地元の普通だったから

先生にも普通だって教えてもらったから

「あんたが人殺しだなんて思わなかった」

「人殺しなんかじゃない」

「人殺しよ。人殺しと何も変わらないよ」

そんな、こと、ない、よ

「なんでそんなことしたの？」

「なんで答えられないようなことしたの？」

「先生に言われたから」

「先生先生ってあなたの意思はどこ？」

「先生とか親にそうするのが普通だって教えてもらったから」

「人を殺すのが普通だったって？」

「人を殺すのは普通じゃないの、異常なの」

異常じゃない、違う、異常じゃない、

「殺してどうするつもり？」

「………ご飯に入れる」

「は？」

「……人を食べて成長した子は、強い子になる」

「何言ってるの、そんなわけないじゃん」

「サトウには代々佐藤家を、ミソには余った脳みそを使う」

「じゃあまさか今日のチャーハンに入ってたのって」

「サトウさん」

「……おえっ」

ああ、食べたものを……もったいない

「おえっ」

ああ、また、食べたものを……せつかく私が作ったものを……

「……やっぱりあんた、おかしいよ。こんなにおかしいとも思わなかった」

「おかしくない、先生と地元は普通だって教えてくれた」

「普通じゃないの」

「私の普通なの、なんでわかってくれないの」

「わかんないよ、わかりたくないよ」

「なんで」

「なんでもなにも人を殺すのが普通だなんてわかりたくないの」

「なんで」

「この社会ではね、人を殺したら犯罪なの。あんたが何人殺したか知らないけど、場合によっては死刑だよ？あんたが死ぬことになるんだよ？」

「わかんない、知らない」

「知らないじゃない、知って。人を殺すのは普通じゃないの。気付いて、目を覚まして」

わかんない、知らない、普通だよ、おかしくないよ

「そうやって今まで私に隠してきて、普通から目を背けて、ほかにも隠してることがあるんじゃないの？」

彼女が先生の部屋を開けた。

今日は先生がいた。教室の日じゃないのに。どうしてだろう。

「あ、先生。いらっしゃったんですね。」

「」

「彼女です。」

「誰としゃべってるの？」

「」

「すみません、先ほど壊されてしまっつて。」

「」

「すみません、作れませんでした。」

「だから誰としゃべってるのって聞いてるじゃん、ねえ、聞いてんの？」

「うるさい！！ 今先生とお話してる大事な時間なの！！」

「……先生？」

「はい、先生。」

「なに？　なんで？　なんで部屋から出すの？」

「先生が言ってるんだよ」

「騙されてるよあんた」

うるさいうるさいうるさい騙されてなんかないこれは正しいこと

「あっ」

少し、押してしまった。細い彼女は倒れて頭を机にぶつけて、頭から血が、頭から血が、血が、血が、血が流れて、白い彼女を白い部屋を赤く、赤く、汚していく、彼女が汚れていく、汚されていく、あんなに白かった彼女が、だから、汚れてしまわないように、箱に入れておいたのに、箱から出てきたから、箱から出てきてしまったから、こんなことに、私が、わるい？　私が？

「ねえ、私が悪い？」

「あんたは、わるくないよ」

「私が悪い？」

「わるいのはせんせい」

「先生は悪くない、そうですね、先生？」

「先生、先生は悪くないですよ、悪いのは普通になれない私ですよ？」

「先生、悪いのは、」

「わるいのは、せんせい」

「先生教えてください」

どうして先生は教えてくれないの

「わるいのは全部」

「そうだよ、あんただよ。いなかからできてきてふつうじゃないあんたをそだてたのはわたしなのに、わたしのに、あんたはひとをころした、わたしをころした。せんせい n a っからあんたはむか s n にもどりはじめて、なんな r e m むかしよりおかしくなってる。ねえ、あんた s e i のと k r o f d な a にをまんてるあ n ？」

「ねえ、k e i t l e n n o o ? n e e , k o t r a e r e y i o o 」

あーあ。おかしくなっちゃった。

これで私の普通と同じだね。